

教育の場に演劇を取り入れようとする動きが活発になっている。これは、演劇の中に含まれる様々な要素―表現力、創造性、チームワーク etc.―によって子ども達の発達を促すことが目的だと思われる。しかし、演劇を「教育」という場で扱う為には美術や音楽など、従来の芸術科目と同じようには捉えられない難しさもあり、教育現場では試行錯誤をしている様子もうかがえる。

そこで、その背景にある問題について考えてみたい。

私自身はスクールカウンセラーとして小、中、高校に赴き仕事をしてきたが、長く教育現場にしていると、様々な問題行動や問題症状を抱えている子ども達に出会うことも多くなった。家庭から小学校へ、又小学校から中学校へと環境が変わるたびに上手に適応できず、ストレスを抱え込む子どもも多い。反面、元気が良すぎて枠の中にはまらず教師が手を焼くケースも見かける。

こうした現象を、単に子どものコミュニケーション力の問題だと指摘する教育関係者も多い。しかし、子ども世界に見られる現象は、ある意味では大人世界の縮図である。

多様化が進む現代では、人生の選択肢や可能性が増え、いろいろな考え方が受け入れられるようになった反面、人知れず葛藤や摩擦、ストレスを抱えている人も多い。何を大切にするのか、どこまでが人に迷惑を与えない行為なのか、価値観や意識が一人一人異なれば(それが多様化ということなのだが)自ずと対立も生まれやすくなる。相互理解、相互信頼の良い関係を築くためには、互いを理解するために長い時間やプロセスが必要であろう。しかし、日常の「忙しさ」や「便利さ(デジタルなコミュニケーション)」の中でコミュニケーションはむしろ表面化する傾向があり、人との衝突を避けようとする意識が加わればますます関係性は希薄に、更には疑心暗鬼が生まれるという悪循環が続いていく。

開放感と閉塞感、希望と不安が混在する中で様々な現象が見え隠れしているのが今の時代である。

もともと日本の文化には「本音と建前」という言葉が示すように、葛藤を言葉で直接表現せず相手に察することを期待する高度な(?)コミュニケーション法があった。「建前」という枠の中に人の在り方を規定し、ふとした仕草や表情に出る「本音」の部分(枠の中にはまりきらない個としての感情とも言おうか)を読み取ることが良しとされていたのである。「空気を読む」と言うこの呼吸こそ、人が無意識のうちに同調していくプロセスでもあったような気がする。良くも悪くも、表面的には対立が生まれにくい受容的な文化を支えてきたとも言えるだろう。

実際、コミュニケーションとは言語による情報交換にとどまらず、人との関係性(距離感や連帯感)を築く感情の交流であり、感情とは表情や態度、行動など身体性と切り離すことができない心の現れである。

しかし、「常識」という言葉とも置き換えられる「建前」は、価値観が多様化した現代では必ずしも万人が共有できるものではなくなった。言葉と感情―言語と非言語―が異なるメッセージを、今の時代に誤解や混乱がなく誰に伝えることができるのだろうか？

「自由尊重ー多様化」の時代の真に明るい面を生きたいと願うなら、一人一人が自分の投げるボールの癖や偏りに気づき、もう一度コミュニケーションの原点に戻って他者との関係を築き直していく必要があるのだろう。

中学校でも、友達関係について尋ねると、明るい笑顔で「楽しい」と答えながら、首を少し傾げて「微妙!」と付け足す子ども達に出会った。そこには友達の発する言葉や態度をどう受け止めて良いのか迷う姿が見える。

実際、子ども達が語る言葉からは、自分が抱える問題や感情を把握していないように思えることが多い。なぜ突然大声をあげてしまうのか… 学校に行きたいはずなのになぜ家から出られないのか… なぜ何度も確認するのに不安が収まらないのか… しかし、これは全て、自分の置かれている環境(人との関係も当然含む)とのコミュニケーションに対する反応であり結果なのである。

更に、人間には年齢に応じた発達課題があるのだが、中学校で起こる問題行動、問題症状の陰には幼児期の課題である「自己中心性」「依存性」に由来する未熟性が色濃く残されている場合が多い。今の時代は子どもが育ちにくい構造を抱えているのだ。

人の心も人との関係も、鍛練や挫折、葛藤や苦悩など厳しい道を経て初めて育つ。人との違いを理解し受け止め合う深いコミットメントを目指すことで現代の悪循環を良循環に変えていくことができるだろう。それが今、何よりの急務だと言えるかもしれない。

人間関係を凝縮して表現する演劇には、様々な要素が含まれており、こうした課題を解決していくためのヒントやツールはたくさんあるのだと思う。だからこそ、冒頭に述べたように、教育現場で今演劇が注目を集めているのだろう。しかし、演劇をより有効に活用するためには、子ども達の発達年齢や、対象集団(個人)、活動の目的、教師の役割などを事前に検討することが最も重要であると言える。背景にあるコミュニケーションの問題と演劇が果たす役割をきちんと理解してこそ、演劇を使ったアプローチの可能性は様々な方向に開けてくるのだと思える。

例えば、豊富な遊具や一人遊びが可能な環境などから様変わりした子どもの遊びの世界を意図的に提供し、体験の場として利用することもできるだろう。今の時代にあうルール観を育てるためのヒントが得られるかもしれない。

訓練されたファシリテーターを招き、身体性と感情(心)との繋がりを発見する作業も、コミュニケーションに対する捉え方を変えるだろう。子ども達だけでなく、教育の場にいる教師も実体験を通し、子どもの発する様々なメッセージが読み取れるようになればなおさら有益である。

表現すること自体が子ども達のカタルシスになりストレスを発散する場となるかもしれない。

また、作品を作り上げるプロセス、上演するプロセスがそのまま日常生活での関わり合いを密にし、子ども達の達成感や絆づくりに貢献するという事も考えられる。

この分野でのますますの議論が求められるところである。